（1）　2版　明治20年創刊　第36126号（第3種郵便物認可）　THE JOM　（日刊）

山口氏が引退表明

「定年制厳格に守る」

社党

社会党の山口鶴男前総務庁長官（八旧三区＝は一日、高崎市内で記者会見し、「（七十歳）定年制を厳格に守る」と次期衆選に出馬せず、今期限りで引退する意向を表明した。先月二十八日の田辺誠衆院議員＝旧二区＝に続く表明で、県内二人の現職代議士の不出馬により、社会党県本部は衆院選公認候補の選考作業を大幅に練り直す必要に迫られた。

山口氏は引退理由について、「書記長時代に定年制の方針を既持すると繰り返し話し、先輩に対しても守っていただきたいと」と説明。七十歳の誕生日の今月四日より前に公認が決まれば、党内的には前例があり問題なく決意したとした。引退の意向を固めたのは七月二十三日の参院選投開票日の夜。村山富市首相を公邸に訪れた際、引退を胸に秘め、内閣改造では閣外に出ることを伝えたという。

県本部関係者には先月二十三日に内々に伝え、三十一日に角田義一委員長らに打診し、二日、記者会見に先立って行われた旧三区代表者会議で正式に表明した。

去就をめぐって、五区から党内の選挙区を「なるべく幅広い勢力を結集する側と因を希望する同氏とのため努力したい」と、引退と直接関係ないとした。

四十年近い代議士生活を振り返り、「軍縮予算の編成、行政改革の推進、地方分権推進法の成立を実現できた。激動の時代を社会党の政治家として活動できたことは望外の幸運だった」と感慨深そうに述べた。

長年のライバルだった田辺氏については「県議から一緒に衆院落選まで一緒、引退も同じでなにかの因縁を感じる」と話した。

山口氏は県教職員組合書記長から県議を経て、昭和三十五年、衆院選初当選。十期目、党国対委員長、書記長を歴任、土井たか子委員長とコンビを組んだ書記長時代の平成元年の参院選で党を大勝に導いた。

党内左派の重鎮として強い影響力を持った。昨年六月の自社連立の立役者として頑張っていただいた。四十年の政治活動に心から感謝し、代議士の村山首相の期待として、政権の中枢で活躍した。

群馬の地に継いでいくのを使命と考えたい。

引退表明の会見に臨む山口鶴男氏＝高崎市労使会館

当確発表に歓喜の叫び

清水陣営

○…清水氏の事務所では、午後九時十五分の当確の発表とともに「ウオー」という大きな叫び声、拍手がわき起こった。約二百人は「群馬町を生まれ変わらせようとする若さの熱意の結果。皆さんの気持ちをしっかりと胸に、新しい町づくりに励みたい」と力強くあいさつした。

初当選を決め、支持者の握手攻めにあう喜びの清水氏

の支持者が見守るなか、到着した清水氏は支持者との握手攻めにあい、抱き合って喜ぶなど事務所は興奮のるつぼ。小雨の中、支持者は時間とともに増え五、六百人に膨れ上がった。壇上で花束を受け取り、だるまに目を入れた清水氏の顔が、目の前に現れると、拍手と歓声が一段と高まった。

群馬町長選

清水氏 競り勝つ

大山氏に540票差

志村晋三郎前町長の引責辞任に伴う群馬町の出直し町長選は一日投票が行われ、即日開票の結果、新人の清水稔氏（％）が八千八百一票を獲得して、同じく新人の大山好弘氏（ニ）に五百四十票の差をつけて初当選した。清水氏は志村氏を支援するグループに推されて立候補し、前回の雪辱を期す大山氏に激しいつば競り合いを演じたが、四期にわたる町議の実績を前面に活力ある町づくりを訴え、幅広い支持を集めて逃げ切ったもの。投票率は町議選とのダブル選挙となったこともあり、七七・七一％（男七四・七八％、女八〇・五四％）と前回の七六・〇四％を上回った。

今回の群馬長選は、四月のこの町長選挙で大量の違反者を出し、町を混乱させた責任を取って志村氏が辞任したのを受けて行われた。しこりを残した前回選挙の再現を避けようと、旧志村派のグループを中心に水面下で一本化調整が進められたが、不調に終わり、清水、大山両氏が相次いで出馬表明。さらに革新系の住民団体の要請を受け矢嶋俊良氏（六七）が立候補、新人による三つ巴の戦いとなった。

清水氏はいち早く名乗りを上げた大山氏の対立候補として、旧志村派の要請を受けて立候補。志村氏の後援会組織を生かして短期間のうちに町内三十三支部の後援会組織、町議四期の実績などを訴えて全町に浸透を図り、新住民らの支持票獲得にも成功して着実に票を伸ばした。

（解説）選挙違反事件を きっかけとした出直し町長選は、清水氏と大山氏の事実上の一騎打ちとなった。志村町長の後継とされる清水氏が、前回（四月）の雪辱に燃える大山氏に競り勝った。旧志村派を中心とした強固な組織力と政治経験、さらに三つ巴の選挙で志村町長の後援を受けて立候補。志村氏の後援会組織を生かして短期間のうちに町内三支部を作り、町を混乱させた責任を取って志村町長が辞任したのを受けて行われた。しこりを残した前回選挙の再現を避けようと、旧志村派のグループを中心に水面下で一本化調整が進められたが、不調に終わり、清水、大山両氏が相次いで出馬表明。さらに革新系の住民団体の要請を受け矢嶋俊良氏（六七）が立候補、新人による三つ巴の戦いとなった。

清水氏はいち早く名乗りを上げた大山氏の対立候補として、旧志村派の要請を受けて立候補。志村氏の後援会組織を生かして短期間のうちに町内三十三支部の後援会組織、町議四期の実績などを訴えて全町に浸透を図り、新住民らの支持票獲得にも成功して着実に票を伸ばした。

（四月）の雪辱に燃える大山氏に競り勝った。旧志村派を中心とした強固な組織力と政治経験、さらに三つ巴の選挙で志村町長の後援を受けて立候補。志村氏の後援会組織を生かして短期間のうちに町内三支部を作り、町を混乱させた責任を取って志村町長が辞任したのを受けて行われた。しこりを残した前回選挙の再現を避けようと、旧志村派のグループを中心に水面下で一本化調整が進められたが、不調に終わり、清水、大山両氏が相次いで出馬表明。さらに革新系の住民団体の要請を受け矢嶋俊良氏（六七）が立候補、新人による三つ巴の戦いとなった。

（関連記事 20面）

対立の解消が課題

清水氏

町全二分した前回の町長選は、総務前町長の妻や二前に志村氏を支持してきた町議らを中心に「両派がまとまれる保守の擁立が水面下で画策されたが、しかし本決議案が提出されなど町政が混迷、志村、大山両氏の対立はますます深まっていた。このため、出直し選挙を迎えた。矢嶋氏の立候補で選挙戦は、志村